戦中戦後の食糧事情

藤白　紅子

援農の思い出

太平洋戦争が始まったとき、私は美唄から岩見沢市立高等女学校に進学していました。私達が美唄の援農に入ったのは、昭和 17 年だったと思います。癸巳部落（当時はそう呼んでいました）の水田農家でした。汽車通学生が多いので、美唄駅前に集合して 1 組 10 名くらいで各家庭に入りました。

学生達は水田に入るのは初めてです。農家の方に習いながらの作業でした。まず皇居遥拝*1 をしてから始めます。田の草取りです。馴れないので、足はぬかるは、腰は痛いは、なかなか前進しません。１人で 4 列ほど受持つのです。横に一列に並んでの除草は、時間がたつにつれて列が乱れ、早く終わった人は遅い人の手助けをしながら、汽車の時間までがんばりました。終わった時には歩けないほどに疲れていました。それでもお昼にはおにぎりを御馳走になったことが忘れられない思い出です。なにもできなかった人々が力を合わせて草取りを終えた喜びも忘れられない思い出のひとこまです。おなかがすくので干しバナナを買って行き、友人と分け合ったことも忘れられないことです。

この頃から店頭にお菓子が不足してきたようでした。また薯畑や小豆畑などの草取りもしました。初めて畑に入る人にはこれも難しい作業で、草と苗を間違えて、後ろを見たら苗が数本しか残っていなかったという友人もいました。かなり農家には迷惑をかけたように思います。今思えば猫の手間ほどのことしかできなかったのだと思います。この畑の草取りは岩見沢の隣の町でのことだったと思います。

秋になると稲刈りをしました。これは 1 学級全員が 1 農家に入るのです。45 人でほとんど仕上げた所もありました。稲刈りも初めてですから、鎌で手を切らないかとひやひやしながら刈り始めました。5 列を受持って「ゆっくり落ち着いて、手を切らず」と自分に言い聞かせながら刈りました。腰が痛くなるので立ったりしゃがんだりしながら、少しずつおもしろくなってもきました。自分の刈った所がきれいに稲が横に置かれてゆくのです。初めての経験でうれしく思いました。おかげで田の草取りと稲刈りだけは、よい思い出になっています。農家の苦労もよくわかりました。自然農法のやり方もおぼえたように思います。

食糧営団で

昭和 18 年、卒業して美唄の食糧営団（のちに食糧公団となりましたが、お米屋さんの組合のようなものです。）に就職しました。ソロバンのできなかった私には初日がとても長い 1 日でした。ぐったり疲れて家に帰ったときには、バタン、キュウの状態でした。美唄市街の主食の配給をしていた所です。米穀通帳にもとづいて、年齢別に計算されて 1 日の配給量が計算されます。1 か月を 3 回に分けて、1 回、10 日分ずつを配給するのです。転出や転入があると日割りで計算されますので、そのつど点検されます。食糧事情が厳しくなりだしたので、なかなか皆さんも量については気を配っていたようです。

だんだんと人手もなくなり（男の人達が出征したため）女性ばかりで配給事務に当たるという時期が何年かありました。

終戦

そのうちに終戦を迎えました。8 月 15 日正午に、天皇陛下の放送があるからとラジオで知らされ、隣組*2（大通南 9 丁目の第一町内会）の婦人部長の役をしていた母は、自分の受持ちの区域を連絡してまわりました。ラジオのない人は私の家で聞いたとのことです。私は職場の近くの家で、職場の人達と聞かせてもらいました。

ラジオに雑音が入り、あまりはっきりと聞きとれませんでしたが、終戦の宣言であることだけはわかりました。

「戦争が終わった…」一瞬、肩の力が抜けたように感じました。それからが大変でした。町内の人々みな無気力な状態になり、何をしてよいかわからないというような感じの人が多かったように思われました。

それから何が起きるかわからないということでしょうか。にわか憲兵が組織されて腕章を付けた人が公団の横にしばらく待機しておりました。声をかけると自分たちは臨時で腕章はしているが、権限はないと話しておられました。

いろいろなデマが流れました。北海道はソ連の配下になるということ、またすぐに進駐軍が来るので女や子供は家から出ないようにとか、気の張る毎日でした。

戦後のくらしと食糧事情

終戦後、軍隊がなくなって、帰って来た人々が徐々に増えました。食糧公団にも男性が入ってきました。ますます食糧が欠乏してきました。遅配どころか欠配が続くようになりました。10 日分の配給が 8 日分、6 日分とだんだん少なくなったのです。お米の代わりに、雑穀類が多くなりました。タイ米、カシュウ米*3、砂糖、トウキビの粉、めんたい（うどんの折れたもの）等、いろいろなものを配給したことが思い出されます。一番ひどかったのは、澱粉カスです。この塊をストーブの上にあげて焼いて食べた記憶があります。

とにかく衣食に不自由しました。我が家でも姉の着物や母の着物がほとんど食糧に変わりました。食糧難の折はなんでも食べました。お米の泳いでいるようなおかゆ、いもがゆ、大根や菜っ葉のおかゆ、芋だけの食事、南瓜御飯、いま思えばずい分レパートリーの多い食事でしたよね。近所の方で今でも芋の顔を見ると戦時中を思い出すからいやだと話す方もいます。狭いところでも土を掘り返して畑にし、なんでも植えました。また平成 5 年から 6 年へかけての米騒動の折、戦時中や戦後の食糧難のことが思い出されて、いやな思いがしました。

当時は燃料も履物もすべてが無いという生活でした。ワラで編んだ長靴をはいたこともおぼえています。私の家では石炭が手に入らず、美唄川に流炭*4 を拾いに行きました。御近所の方もみなそうでした。1 年分の石炭を拾うのは大変でした。兄が除隊になって来たので、ジョレン*5 を使い石の混ざったのを拾うのです。それでも無いより良いのです。リヤカーで家まで運びました。勤めのあとの夕方や日曜日に拾いました。つらいとも思わないで石炭小屋にいっぱいにしました。今思えばよくやったものだと思います。

＊　＊　＊　＊　＊

だんだん年月が過ぎて三井が閉山になり、家々の灯が少なくなって、夜景の美しさがみられなくなり、淋しくなりました。そして三菱も閉山になりました。

戦時中、三井、三菱で韓国や中国の人々が働いてきたことなど、それまで知りませんでした。終戦後、帰国のために山を降りて来たその方々を美唄駅で見たときは、本当にびっくりしました。だけど炭鉱もこの人々に支えられていたことを思えば、我々も改めてお礼を言わなければならないのです。本当に有難うございました。

戦後 50 年を経て

学生時代は薙刀を習い、体育の時間には、寒中稽古、槍突き等もしました。銃後では女性達もがんばりました。……そして敗戦。一部の政治家達が戦争を始めたかと思うと、恨みがつのります。

半世紀がたちました。今、阪神大震災で生地獄にあいながら亡くなられた方々の御冥福をお祈りし、罹災された皆様の御立ち直りをお祈りしています。天災とはいえ、人生の試練が襲いくるたびに、生きてゆくむずかしさ、大変さを感じています。私に残された年数や時間を大事にしたいと思っている此の頃です。

（ふじしろ　こうこ　大正 15 年生まれ）

*1　**皇居遥拝**　戦前、戦中に天皇陛下をあがめるため、皇居の方角に向かい、おじぎをして拝んでいた。

*2　**隣組**　第二次世界大戦中に制度化された国民統制のための地域組織のこと。市区町村の下の単位として隣保班が設けられ、配給、供出、動員など行政機構の末端組織としての役割を果たした。隣保班は、都市では隣組、農村では五人組と称することが多かった。

*3　**カシュウ米**　加州米。カリフォルニア米のこと。

*4　**流炭**　石炭を川で洗ったときに、下流に流れてしまった石炭のカス。これを拾い集めて乾燥させ、燃料に使っていた。

*5　**ジョレン**　「鋤簾」土・小石などをかき寄せる道具。長い柄の先に、竹で箕のように編んだもの、または鉄板製の歯を取り付けたもの。